

論文の要旨

論文題目 日韓母語話者及び韓国人日本語学習者における「再勧誘」行動に関する語用論的研究
氏名 鄭 在恩
学位 博士（文学）
授与年月日 平成 25 年 4 月 30 日

本研究は、日本語母語話者と韓国語母語話者及び韓国人日本語学習者による「再勧誘」行動について、様々なストラテジーの使用傾向や言語表現の異同を談話完成テストにより明らかにし、その結果を意識調査の結果と関連づけながら、語用論的観点から考察を行ったものである。各章の概要は以下のとおりである。

第 1 章では、本研究の意義と目的について述べた。勧誘場面において、相手にすぐに承諾してもらえなかった場合に、相手を感じる負担を軽減させ、人間関係が損なわれないように配慮しながら、働きかける行為を繰り返すことがある。このように、最初の勧誘よりも、一度相手に躊躇された後に繰り返される「再勧誘」において、様々な勧誘ストラテジーが現れると考える。そこで、本研究では「再勧誘」を取り上げ、その中に現れる配慮の仕方における日韓の類似点と相違点を明らかにし、両文化ではそれぞれどのような点が重視されているかを解明することを目指す。

第 2 章では、本研究における理論的枠組みとなる発話行為理論とポライトネス理論、異文化間語用論、中間言語語用論、勧誘行動を分析した先行研究を概観した。日韓の両母語話者を対象とした異文化間語用論分析には、「断り」や「不満表明」などに関するものがあり、韓国人日本語学習者を対象とした中間言語語用論分析においては「断り」や「依頼」が多く取り上げられている。しかし、「勧誘」行動に関する研究は少ない上に、躊躇されたあとの「再勧誘」行動に関する研究はなされておらず、勧誘表現や勧誘のパターンに関する比較研究がほとんどである。また、勧誘に関する研究のほとんどは勧誘者側だけに焦点を当てたものであり、勧誘者の誘い方に対する被勧誘者の受け止め方や意識については言及されていない。

第 3 章では、本研究で実施した調査方法と調査の概要について述べた。本研究では、日韓母語話者と上級レベルの韓国人日本語学習者の 20～30 歳代の大学生と大学院生を対象とし、談話完成テスト（調査 1）と意識調査（調査 2）を実施した。それぞれの調査に用いた調査票においては、相手との上下関係と相手に与える負荷の度合いを考慮に入れて 6 場面

を設定し、以下のような設問を設けた。

【談話完成テスト（調査 1）】

設問① 勧誘を相手（誘われる側）に躊躇されたら、その後どのように言うか。

設問② なぜそのように（設問①の回答のように）言うか。

【意識調査（調査 2）】

設問① 勧誘者の勧誘に躊躇したらそれ以上に誘ってこない場合、どのように感じるか。

設問② 勧誘者の勧誘に躊躇したら 2 回も 3 回もしつこく誘ってくる場合、どのように感じるか。

データの分析については、談話完成テストで得られたデータは意味公式に分類し、意識調査で得られた回答は幾つかのカテゴリーに分類した上で、いずれも統計処理を行い、量的分析とした。また、発話内容の言語表現を取り上げて質的分析も試みた。

調査 1 の設問①で得られたデータは周辺部分と主勧誘部分に分けた上で、周辺部分は「あいづち」「相手への負担の軽減」「詫び」「遺憾表明」の 4 つの意味公式に分類し、主勧誘部分は「都合・理由の尋ね」「代案・解決策の提示」「誘導発話」「共同行為要求」「勧誘の諦め」「次回への勧誘」の 6 つの意味公式に分類した。

一方、調査 2 の設問①で得られた回答は「気にしない」「ホッとする/助かる」「勧誘に応じない/断る」「寂しい/残念に思う」「気になる」「申し訳ない」「考え直す」「勧誘に応じる」「その他」に分類した。また、設問②の回答は、「気にしない」「勧誘に応じない/断る」「押し付けがましい/しつこい」「面倒だ」「苛立ちを感じる」「悩む/困る」「申し訳ない」「嬉しい/有難い」「勧誘に応じる」「その他」に分類した。

第 4 章では、第 3 章で掲げた二つの調査から明らかになったことを述べた。

(1) 調査 1 の設問①

目上の相手に再勧誘する際に「詫び」の使用が有意に多いことが被験者グループに共通してみられた。また、韓国語母語話者と韓国人日本語学習者は上下関係に関わらず、負荷の度合いが大きい場面において積極的に誘い続ける傾向がみられた。また、日本語母語話者には男女の間に有意差がみられず、韓国語母語話者と韓国人日本語学習者には男女の間に有意差がみられた。韓国語母語話者の男性は「相手への負担軽減」の使用が有意に多く、「詫び」の使用が有意に少なかったのに対し、女性は「詫び」の使用が有意に多く、「相手への負担軽減」の使用が有意に少なかった。韓国人日本語学習者の場合は、男性は「あいづち」の使用が有意に多く、女性は有意に少なかった。

(2) 調査 1 の設問②

主勧誘部分の意味公式において被験者グループ間に顕著な意識差がみられた。同じ意味公式を使用する場合でも、日本語母語話者には相手に考える余裕を与え、相手に判断を委ねるといった回答が多かったのに対し、韓国語母語話者と韓国人日本語学習者には自分の気持ちを相手にはっきりと伝え、少し強引に誘うという回答がみられた。回答には日韓の意

識差が大きく現れ、韓国人日本語学習者は韓国語母語話者に近い回答が非常に多かった。

(3) 調査 2 の設問①

日本語母語話者と韓国語母語話者において、場面による回答差がいくつかみられた。その中でも、日本語母語話者は目上の相手に負荷の度合いの大きい再勧誘をやめられる際に、「ホッとする」の回答が有意に多く、韓国語母語話者は「勧誘に応じる」の回答が有意に多く、両者の違いが明確に現れた。しかし、男女による回答差はみられなかった。

(4) 調査 2 の設問②

各被験者グループにおいて、場面による回答差が若干みられたものの、統計処理を行った上で有意差があると言えるのは、韓国語母語話者だけであった。韓国語母語話者は目上の相手に誘われ続ける場合、「悩む/困る」と「申し訳ない」の回答が有意に多く、目下の相手については「押し付けがましい/しつこい」と「勧誘に応じない/断る」の回答が有意に多く、同等の相手については「気にしない」と「苛立ちを感じる」の回答が有意に多かった。また、設問①と同様に、回答に男女差はみられなかった。

第 5 章では、本研究で明らかになった結果を日韓で比較しつつ、語用論的観点から考察を行った。

(1) 「再勧誘」発話にみられる日韓差

韓国語母語話者は相手の都合や躊躇する理由について立て続けに質問をする発話が比較的多く、相手の都合を尋ねた後にさらに誘い続ける傾向がみられた。また、相手の領域に立ち入った発話が多くみられたことと、与えられた場面設定に被験者自身がさらに具体的な場面設定を加えて、相手に働きかけることが特徴的であった。再勧誘をやめる際には、次回への勧誘に具体的に言及する発話が多くみられた。

それに対して、日本語母語話者は「都合がよければ」「無理なら仕方ないけど」「ご無理でなければ」などの相手の負担を軽減させる表現を用いて、相手に無理に押し付けないように配慮した婉曲的な誘い方をする傾向が強い。また、相手に判断を委ねたり、相手に考える余裕を与えたりする間接的な表現を用いて誘い続けることが特徴的である。再勧誘をやめる際には、急に誘ったことを謝ったり、相手が躊躇したことに対して気にさせないように配慮したりする発話が多くみられた。

(2) ポライトネス理論からの考察

日本語母語話者には相手との間に一定の距離を保ちたいという欲求に働きかけるネガティブ・ポライトネスに重きを置く傾向があるため、相手のネガティブ・フェイスに訴えかける表現が好まれ、それが対人配慮と良い人間関係を築き、維持することに繋がると認識されていると言える。それに対して、韓国語母語話者には相手に認められたいという欲求やお互いの心理的距離を縮めたいという欲求に働きかけるポジティブ・ポライトネスに重きを置く傾向があるため、積極的に相手のポジティブ・フェイスに訴えかける表現が好まれると言える。

本研究で得られた韓国人日本語学習者の発話には、韓国語母語話者の傾向と考えられるポジティブ・ポライトネス・ストラテジーと日本語母語話者の傾向と考えられるネガティブ・ポライトネス・ストラテジーの両方が観察された。

(3) 異文化間語用論からの考察

① コミュニケーション・スタイルの相違

相手とのコミュニケーションの際に、日本の場合にはじっくりと相手の話に耳を傾け、相手に負担をかけないように働きかける傾向がより強い。それに対して、韓国の場合は相手への反応や共感を素早く示すことがより好まれる傾向がある。

② 対人配慮意識の相違

日本語母語話者は相手に負担をかけないように常に心がけており、相手の負担を少なくし、相手との間に気まずさを作らない傾向が強い。それに対して、韓国語母語話者は相手の状況や気持ちに共感を示しながらも、自分の意向や気持ちを明確に伝えてそれを相手に分かってもらおうとする考え方が相手への配慮とされている。

③ 相手とのテリトリー意識の相違

日本語母語話者は相手との距離を大きく取る傾向があるため、親しい間柄であっても、お互いにとって良い距離感を保ちながら相手と関わるのが望ましい付き合い方であると考えられている。一方、韓国語母語話者は相手との距離を小さく取ろうとする傾向があるため、相手の身の回りに起きたことを自分のことのように思っただけで行動し、一歩踏み入って相手と関わるのが他人との付き合い方として普通であると考えられている。

(4) 中間言語語用論からの考察

① 母語の影響による特徴

韓国人日本語学習者は、「詫び」の使用頻度が低い点と「共同行為要求」の使用頻度が高い点において韓国語母語話者に近い傾向を示している。さらに、「共同行為要求」にみられる勧誘表現も韓国語母語話者と非常に似通っており、相手の存在の不可欠性を述べて働きかける発話が多いことも韓国語母語話者と共通している。

その他に、調査2の設問①にみられた意識調査の結果にも韓国語母語話者との類似性がみられた。すなわち、相手に再勧誘をやめられた際の意識に関して、「ホッとする/助かる」の回答率が低く、「寂しい/残念に思う」の回答率が高い点である。また、調査2の設問②にみられた意識調査の結果にも韓国語母語話者との類似性が観察された。すなわち、相手に誘い続けられた際の意識に関して、「押し付けがましい/しつこい」の回答率が低く、「嬉しい/有難い」と「勧誘に応じる」の回答率が高かった点である。

② 学習環境の影響による特徴

韓国人日本語学習者には日本語母語話者と同様に、周辺部分の発話数が多くみられ、これは韓国語母語話者にみられない特徴であった。また、意味公式の中でも、「あいづち」と「相手への負担軽減」の使用回数が韓国語母語話者より多くみられた。さらに、韓国語母語話者に比べて主勧誘部分の「勧誘の締め」と「次回への勧誘」の使用頻度が高いことが

日本語母語話者に類似しており、その言語表現においても日本語母語話者に近いものが観察された。

③ 韓国人日本語学習者特有の特徴と問題点

韓国人日本語学習者には二つの調査において、母語の影響を受けている部分と日本語母語話者の言語使用に似通った部分の両方の特徴がみられた。日本語母語話者に近い傾向がみられた要因としては、学習環境の面で日本語を使用しながら日本で生活しているということのほか、日本語らしい日本語が話せるようになりたいという学習者の意識が働く結果、そのストラテジーの一つとして日本語母語話者の真似をしていることも考えられる。しかし、学習者は母語の知識から類推しながら日本語を考えてしまう面もあるため、不適切な使用が生じてしまうことも多々ある。

第6章では、第4章で述べた本研究の主な研究結果をまとめ、それを日本語教育及び異文化理解教育にどのように役立てるべきかについて述べた後、残された今後の課題を示した。

学習者が会話の状況や相手との間柄によって柔軟に表現を使い分けられる力を身につけるためには、テキストの文型だけではなく、日本語の社会文化的、語用論的な側面を指導しなければならない。本研究で示唆された点は、日本語と韓国語においてより適切な「勧誘」と「再勧誘」を理解し、言語そのものだけではなく、言語使用に反映されているお互いの社会背景や文化における人々の価値観の類似点と相違点の理解にも役立つものと考えられる。

最後に、今後の課題として次の3点が挙げられる。1点目は、調査対象と場面設定の再考である。今後の調査では、日韓母語話者の社会人を対象とし、人間関係も職場に即したものを設定する。また、韓国人日本語学習者として中級レベルの学習者も対象とし、学習レベルによる差がみられるのかも調べる。2点目は、データの収集方法の再考である。ロールプレイや自然発話のデータを収集して、勧誘を行う側と受ける側とのインターアクションを検証していく。3点目は、日本語教育の現場に導入するための方法を検討することである。日本語の社会的・文化的な要因に学習者の注意を向ける習慣をつけさせ、場面や状況を考慮した様々なストラテジーが使えるようになることを目標にするなど、日本語の指導において段階的かつ継続的な教室活動を取り入れることが必要とされる。